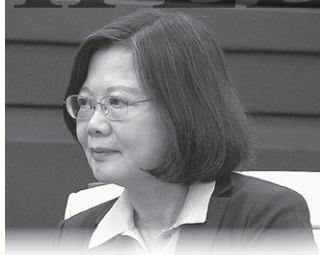


現代二国志

SAMPLE



近藤伸二

勉誠出版

SAMPLE

[屏写真]

the White House

<https://www.whitehouse.gov/>

台灣總督府

<http://www.president.gov.tw/>



蔡英文(台湾総統府新聞與活動より)

はじめに

動き出した米中台

二〇一六年から二〇一七年にかけて、米国・中国・台湾を取り巻く状況が大きく変化している。まず台湾で二〇一六年五月、台湾の主体性を重視する民主進歩党（民進党）の蔡英文政権が発足した。二〇一七年一月には、「米国第一」を掲げる共和党のドナルド・ト

ランプ政権が始動した。同年秋には、中国共産党（共産党）の全国代表大会（党大会）が開かれ、習近平政権は一〇年間の折り返し点を迎え二期目に入る。党内で権威を高めた習総書記は、大胆な改革を断行するとの見方が強い。

民主社会では、政権が交代すれば、政策も大幅に変わる。特に、二大政党制が確立している台湾と米国はその傾向が顕著だ。台湾では、中

SAMPLE



習近平(台湾総統府新聞與活動より)

台融和路線を進めた中国国民党(国民党)の馬英九えいきゅう総統の後を継いだ蔡英文総統が、中国と距離を置く姿勢に転じた。中国は台湾との対話を打ち切り、台湾の友好国切り崩しなど報復措置に乗り出し、中台関係は緊迫の度を増している。

トランプは二〇一六年一二月、中国への配慮から歴代の米大統領が就任前も含めて控えてきた台湾総統との電話会談に踏み切った。メディアアに対しても「一つの中国」政策の見直しを示唆するなど、米中台関係を激しく揺さぶった。トランプは結局、「一つの中国」政策を堅持する方針を確認したが、蔡英文は必要なら再びトランプと電話会談することもあり得ると述べている。リーダーが代われれば、中国が絶対に譲歩できない「核心的利益」と位置付ける「一つの中国」の原則さえも覆される可能性があることが明らかになった。

鍵を握る「一つの中国」巡る攻防

中台関係はこれまでも双方の出方に加え、米国の関与の仕方に左右されてきた。米中台

関係は台湾海峡の平和と安定の土台であり、これが崩れると、東アジア全体が混乱に陥る。トランプ大統領の誕生や英国の欧州連合(EU)離脱決定など自国中心主義が世界に広がるこの時期に、蔡英文、習近平、トランプという役者がそろったことで、米中台関係はどのように展開していくのだろうか。ここで鍵を握るのが、「一つの中国」に関する米中台の主張や立場である。

米国は「一つの中国」を受け入れているものの、その内容は中国の主張とは異なる。この構図は、日本と中国の間にも当てはまる。だが、中国は活発な外交工作によって、自国の立場を国際社会に浸透させてきた。米歴代政権は人権・民主と経済の板挟みになり、台湾寄り与中国寄り路線の間で揺れ動いてきたのが実情だ。

3 はじめに

一方で、中国は台湾に対しては、「一つの中国」が自らの「中華人民共和国」を意味するのか、台湾が名乗る「中華民国」を指すのか、あえて曖昧にしている。国際社会には『一つの中国』とは中華人民共和国である」と大々的に宣伝しているが、そう言い切られてしまうと台湾は対話に応じる余地がなくなってしまうため、わざと使い分けているのだ。しかし、これも台湾が国民党政権であってこそ通用する駆け引きであり、現政権与党の民進党は「一つの中国」の原則そのものを認めていない。本書はそうした「一つの中国」を巡る攻防を軸に、米中台関係を描き出している。

習近平の「台湾観」と蔡英文の「中国観」

もう一つ、米中台関係を見ていく上で重要になるのが、習近平の「台湾観」と蔡英文の「中国観」である。習は台湾の対岸の福建省に一七年間も勤務し、台湾人の知人が多く、台湾に対する理解が深いと言われる。だが、その割に、習がどんな台湾人と交流し、どのような台湾政策を打ち出してきたのかはあまり知られていない。本書は、習の公式談話を分析するとともに、私自身が習と親しい台湾人や台湾の中国専門家にインタビューすることで、その「台湾観」に迫っている。

これに対し、蔡英文の「中国観」は、台湾の対中交流窓口機関の訪中団の一員として中国と協議したり、政府の責任者として対中政策を指揮したりして、中国と渡り合う中で培われてきた。こうした行跡をたどりながら、蔡の部下として仕えるなど間近で見えてきた人物への取材を通して、その「中国観」を浮かび上がらせている。

さらに、私は本書を執筆するに当たって、台湾が実効支配する金門島と中国福建省の平潭島を訪れた。金門島はかつて中台砲撃戦の舞台となり、平潭島では中国が台湾侵攻を想定した軍事演習を行った。いずれも一つ間違えば中台の本格的な武力衝突に発展してもおかしくなかった危機だったが、それを抑えてきたのが米国である。この二つの島は、米中

台関係を象徴する現場なのだ。

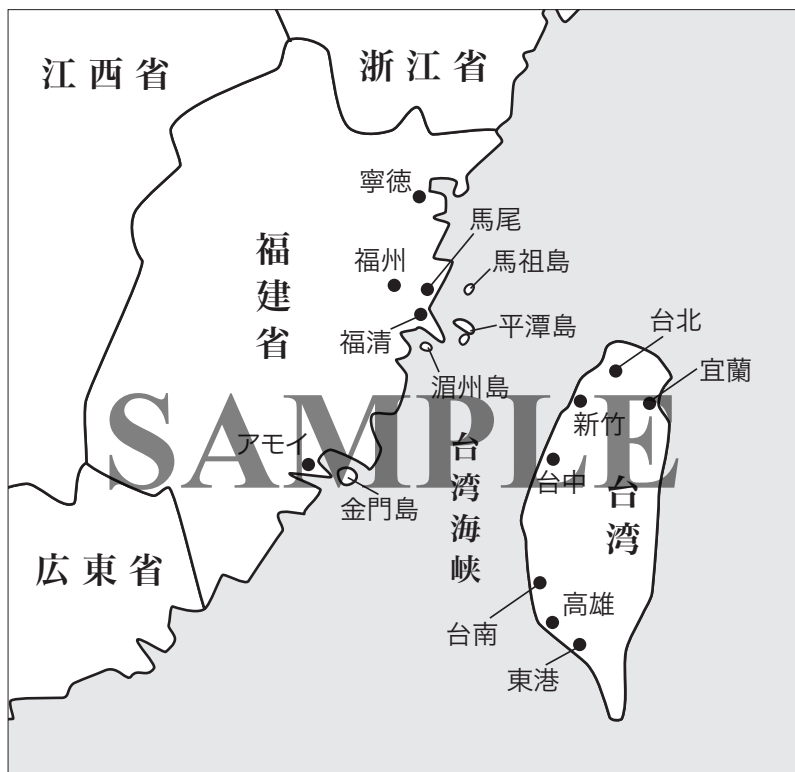
現代版「三国志」

金門島、平潭島とも、現在は経済や観光面で中台交流の拠点となっている。その第一歩となった金門島と福建省アモイ間などの「小三通」（交通、通信、通商の直接交流）を主導して二〇〇一年に実現させたのが、当時、対中政策を主管する台湾行政院（内閣）大陸委員会の主任委員を務めていた蔡英文だった。そして、中国側で受けて立ったのが、福建省長だった習近平である。新聞社の台北特派員だった私は、二人がそれぞれ開いた記者会見に出席し、台湾と中国の運命のぶつかり合いを肌で感じた。

ともに四〇歳代だった時に、「小三通」を巡って静かな火花を散らした蔡英文と習近平は今、互いの威信をかけて、負けられない勝負を演じている。そこに、際立つキャラクターのトランプが参入して三つ巴の戦いを繰り広げる様子は、現在進行中の「三国志」のようだ。

それではこれより、戦後から現在に至る米中台関係をひもときながら、新しい「三国志」の世界に入って行こう。

【台湾海峡周辺図】



米中台 現代三国志 目次

はじめに

台湾海峡周辺図

I 「二つの中国」を巡る攻防

一 ついに崩れた厚い壁

1. トランプが繰り出した「台湾カード」 13
2. 歴代米政権の対台湾政策 19
3. 両立しない人権・民主尊重と経済交流 24

二 トランプ政権の方向性

1. お手本はレーガン 28
2. 対中強硬派で固めた側近 32
3. 東アジアへの関与 37

SAMPLE

II 中台衝突の歴史と抑止力としての米国

一 砲撃戦の舞台となった金門島……………44

1. 中国と対峙する軍事拠点 44
2. 「小三通」の立て役者・蔡英文 50
3. 押し寄せる中国人観光客 56

二 軍事拠点・平潭島が映し出す今昔……………61

1. 台湾海峡ミサイル危機 61
2. 台湾を取り込む「平潭総合実験区」 65
3. 「実験区」にかける習近平の思い 70

III 習近平が見据える「台湾」

一 重要講話に込められた本音……………77

1. 台湾に対する思い 77
2. 「一つの中国」堅持を求める 81
3. 中台統一に向けて 84

二 蔡英文への回答……………87

1. まずは内政に注力 87
 2. 「一国二制度」を公言 90
 3. 畳み掛ける習近平 94
- ### 三 初めて示した本格的な方針……………99
1. 復活した国共トップ会談 99
 2. 台湾政策に関する五つの主張 103
 3. A I I Bへの台湾参加問題 106

四 世界の注目集めた中台首脳会談……………110

1. 六六年ぶりの顔合わせ 110
2. 中台双方の思惑 114
3. 会談実現までの経緯 117

IV 習近平のキャリアを固めた福建省時代

一 一七年間の評価……………121

1. 順調に積み上げたキャリア 121
2. 「黒社会」との癒着には陥らず 125
3. ばつとしない業績 129

二 独自の対台湾政策

1. 福建省と台湾のつながり 133
2. 重視した台湾との経済交流 137
3. 対台湾政策の原型 140

三 激変する台湾情勢

1. 李登輝の「二国論」 143
2. 陳水扁政権の誕生 146
3. 習近平は台湾の投資を歓迎 151

V 台湾から見た習近平

一 証言で明らかになった「台湾通」ぶり

1. 郭俊次の証言 154
2. 習近平という人物 158
3. 郁慕明と張榮恭の証言 160

二 台湾人企業家への配慮

1. 習近平を最もよく知る企業家 164

三 中国専門家の視点

1. 習近平の個性 173
2. 蔡英文政権への出方 177
3. 対中政策責任者の視点 182

VI 中国の対台湾政策

一 共産党と政府の体制

1. 党が方向性を決定 186
2. 権力を掌握した習近平 189
3. 歴代政権の方針 193

二 台湾との経済関係

1. 改革・開放後に活発化した交流 197
2. したたかな台湾企業 200
3. 台湾歴代政権の対中経済政策 204

VII 蔡英文が対峙する「中国」

一 中国と距離を置く政策

1. 「九二年コンセンサス」を認めず 208
2. 中国の報復措置 212
3. 始動した新政権 216

二 交渉団メンバーの経験

1. 国際法との出会い 219
2. WTO加盟で重要な役割を果たす 224
3. 中国と相まみえる 228

三 陳水扁政権時代の教訓

1. 「中国を挑発しない」姿勢を貫く 234
2. 大陸委員会主任委員の経験 238
3. 元部下や識者が語る蔡英文の人物像 243

参考文献

あとがき

208

219

234

247

250